

ぱりあふりい Vol.1 2001年 春(1-3月)号

編集、発行：日本バリアフリー協会 Japan Barrier-free Association 季刊
(事務局)〒102-0084 東京都千代田区二番町 11-1 朝日サテライト二番町 505 号室
ホームページ <http://www.npojba.org> EMAIL info@npjba.org
TEL 03-5215-1485 FAX 03-5215-1735

あけまして
おめでとうございます

NPO 法人

(特定非営利活動法人) 化へ！

この度、「日本バリアフリー協会」を設立しました。

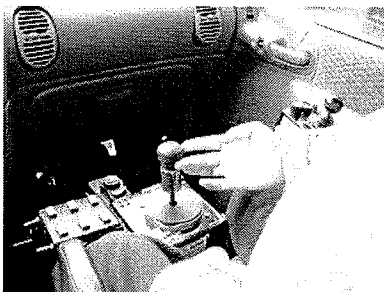
我々は「障害者の社会的地位が向上するためには、一般の人々の障害者への見方を変えなければならない」という信念を持っています。

そこで障害者の理解を深めるために大規模なイベント「ゴールド・コンサート」を開催し、マスメディアによって一般の人々に伝え、いろいろな分野の人々に協力を呼びかけていきます。特に若者の参加をうながしバリアフリーをブームにしていきたいです。

「障害者支援センター」を開設し、障害者の自立を支援します。特に重度の障害者の自立心をかき立てるきっかけとなる留学、海外旅行、スポーツの支援を重点的にやります。また、誰もがわくわくするような自立のための福祉機器を広めていきます。ジョイスティック車もその一つです。

アメリカの大地を自分の意思でかけまわり、感動的な体験ができたことは、ひとえに皆さまの多大なる支援があったからこそだと心から感謝いたします。当協会の NPO 法人化を手始めとして、この体験を日本の豊かな市民社会の形成のために役立てていきたいと思いを。

代表 貝谷 嘉洋



これまでの活動報告

1999年12月 「ヨシを運転させるベンチャー」発足！ 重度の障害者に運転を広めていくための活動。

2000年2月 アメリカ一周壮行パーティー 野田聖子衆議院議員、女優の西田ひかるさん、松島トモ子さんら各界からたくさんの支援者が来てくださり、盛り上げていただきました。

2000年3月 ジョイスティック車取得、運転訓練！ アメリカでジョイスティックという棒状の装置一本を使って、手先のみで運転できる乗用車（ジョイスティック車）を取得。その車で重度の肢体不自由をもつ代表が運転の訓練を受けた。

2000年4月、5月 ジョイスティック車によるアメリカ一周、NHKで放送！ 代表が中心となって、ジョイスティック車を利用してアメリカを一周した。その様子はNHKの1時間テレビ番組でドキュメンタリーとして放送され、多くの方々から反響を得た。

2000年9月 第27回国際福祉機器展（東京ビックサイト）に展示！ 米国アナフィールド社と共同出展。アメリカ一周に利用したジョイスティック車を展示し、障害者や一般の方々実際に見て、さわってもらった。同時に協会への協力を呼びかけた。20人のボランティアの協力、テレビ局3社、新聞社2社の取材を受けた。展示会には総数12万人が来場し、中でも我々のブースは人気をばくした。また、同時にこれまでの「ヨシを運転させるベンチャー」を引き継ぐ形で「日本バリアフリー協会」を設立。

2000年11月 日本バリアフリー協会をNPO（非営利活動法人）化することを東京都に申請。

アメリカ一周を終えて（お礼にかえて）

6月2日に54日間のアメリカ一周を無事終わることができました。また、横断のドキュメンタリーが5月21日にNHKで放送されました。支援者の方のお力添えがあつてのことと改めて感謝申し上げます。

まず、今回の旅で感じたことをお伝えします。

第一に、運転そのものが楽しく気分のいいものでした。疲れていても運転したいと思う時が何度もありました。長い距離を自分の意志で移動できるということは、私のような肢体不自由者にとっては、普通の人以上に興味深いのかもしれません。また、自分で移動することによって就労、レジャー、その他の活動により参加しやすくなるような予感がしました。安全性に対する責任感も同時に強く感じました。

第二に、長い旅の間に安部さんとジョン・ベンソンさんとは苦楽を共にしてきました。その中で管理者と介助者という関係を乗り越え、友人としてお互いに支えあうことができました。また、旅の道中で現地に住む友人が、宿、食事、情報を提供してくれたことは、非常に助かりました。旅は道連れとは良くいったもので、旅をおもしろくしてくれるのは現地で出会う人々であり、一緒に連れそう友人達なのです。

第三に、アメリカの、いや地球の美しい大自然を大パノラマで臨めたことはすばらしい体験でした。ニューメキシコの砂漠とサボテン、アリゾナの赤土の大地、カンザスのどこまでも広がる草原、ジョージアの両サイドに林立する木々、フロリダのエメラルドの海、テネシーの巨大な川、海のような五大湖。自然はいかに尊く、その中で人間はいかにちっぽけか。自然はいかに美しく、都市はいかに醜いか。

次に、今後日本で重度の肢体不自由者の運転を普及させるために、この一周旅行および前後の調査でみつけたことを述べます。

ジョイスティック・システムによって、私のような重度の肢体不自由者でも運転できることがわかりました。それを可能にしたのは、アメリカにおいて、(1)そのような技術が競争市場の中で形成され、(2)ジョイスティック車による運転の評価および訓練を受ける公的な機関が存在し、(3)障害者用の駐車場などインフラストラクチャーが発達しているからです。日本においてはこれらのことがほとんど達成できていません。

さらに、アメリカの多くの州においては、(4)政府が車の改造費、運転の評価、訓練などの費用をすべて負担します。これらの費用は、最高で800万円くらいかかります。私は皆様のご支援によりまして、改造、評価、訓練を行いました。

アメリカ政府はこれらを負担することによって、障害者に雇用の機会を与え、障害者にかかる年金などの費用を抑え、彼らから所得税などを得ることによって、結果として財政を潤すことになりました。また、それがベンチャー企業を育てる投資になりました。

よって今後、日本政府がこれらの費用を負担して障害者に運転の機会を与えることは、障害者へ日本政府が支出している現状の額を基準にすれば、社会の負担であるのではなく、社会全体に利益をあたえることになるでしょう。また、障害者も機会を与えられ充実した人生をおくることができます。

ジョイスティック・システムの技術的なレベルでは、まだ克服する点はありますが、基本的にはアメリカ一周に耐えられるほど安全性、信頼性が高いことが明らかになりました。今後、ジョイスティックと相性のよい電気自動車の発展にもなって、さらなる発展があるかもしれません。(貝谷嘉洋、平成12年6月)

国際福祉機器展、JBA ブースへ来てくださった皆さま

この度は、私どものブースに来ていただきありがとうございました。

私どもにとりまして初めての出展、また非営利活動団体としての出展の試みということでしたが、多くの方に興味を持っていただき、また励ましていただき、大変すばらしい経験となりました。

特に印象的だったのは、ジョイスティック運転装置の前に座り、それを握った時の車椅子のかたの顔がニコリとすることでした。私自身も、アメリカで生活するまで運転ということについては完全に諦めていました。それができるとわかり、実際にジョイスティックを握ったときの感動は未だに忘れられません。

重度の障害者の運転を広めるといっても、私たち障害者自身が「自分で運転できるのだ」という実感、「運転したい」という意志を持たなければ何も始まらないとつくづく感じました。

そういう意味で意義深いイベントであったのではないのでしょうか。

それだけではなく、元郵政大臣野田聖子衆議院議員をはじめ、企業家、技術者、政府関係者、障害者活動家、消費者など様々な分野の方々に来てくださり、それぞれの立場でいろいろなお話を聞かせてもらいました。今後活動を広めていく上でとても貴重なものでした。

また、皆さまにジョイスティック車や活動について説明させてもらいましたのは、ボランティアで参加してくださった方々です。大企業さんのプロの方々とは違いますので、つたない部分もあったと思いますが、受け入れてくださりありがとうございました。

私個人的には、助手席側のジョイスティック運転装置の位置を運輸省に認可してもらうこと、運転免許取得のための教習所の受け入れ、適正検査、実技試験のパスにむけ取り組みたいと思います。

それと同時に、先進諸国における重度の障害者の運転について調査し、法律改正を政府に働きかけたいです。今後ともご支援のほどをよろしく願い申し上げます。

また、今後もいろいろなイベントに参加し認識を深めていきたいと思います。

皆さんにお会いしてお話できたのは我々の何よりの楽しみであり、今後とも何らかの形でコミュニケーションが取ればいいと思います。（貝谷嘉洋、平成12年9月）